

新嘗祭 泉の農家から玄米奉納



國造神社の新嘗祭が12月13日行われ、泉生産組合の農家から今年収穫した「ゆめみずほ」の玄米が奉納され、太陽や大地の恵みに感謝の気持ちを新たにしました。広辞苑によると、新嘗祭は天皇が新穀を天神地祇にすすめ、また親しくこれを食する祭儀で、11月23日に行われ、戦後は勤労感謝の日として国民の祝日になっていますが、國造神社では12月に実施し、自然の恵みに感謝し、地域の平穩を祈念しています。かつて國造神社では農家が主体となって「いり粉祭」の祭儀が新嘗祭で行われ、煎った大麦を神前に供える珍しい風習が伝わっていました。いり粉は漆の下塗りに活用されたことから、いり粉神事は塗師屋さんの信仰も厚く、藩政時代には大聖寺藩主が木地挽き業の隆盛と除疫の祈願のため藩士を代参させるなど注目されていました。残念ながら大麦栽培が廃れて自然消滅し、今では入り粉祭の記憶が残っている農家の人も少なくなり、農家の新嘗祭に対する関心も次第に薄れてきたように見えます。



黒田さんが初老の厄払い 厄除け祈

願祭が13日、新嘗祭のあと行われ、初老を迎える泉2丁目の黒田真吾さん（泉旭町一丁目町会）が家族の見守る中で田中正真宮司から厄払いのお祓いを受け、一家の長寿息災を祈念しました。人生の節目に家族そろって人生儀礼を行う風習はほのぼのする雰囲気があり、平和な気持ちをもたらします。神社が少しでもお手伝いできることを嬉しく思っています。